

三浦市立南下浦小学校

研究テーマ：自ら学ぶ子 ～もっと知りたい・やりたい・学びたい～

1 実践の目的

本校は全校児童が100人に満たない小規模校である。豊かな自然に囲まれて育った子どもたちは明るく素直であるが「学習に対して受け身」「意思表示をすることが難しい」「基礎学力の定着が不十分」といった課題を有する。

そこで、令和3年度より『自ら学ぶ子～もっと知りたい・やりたい・学びたい～』をテーマとし、校内研究に取り組んできた。ここで言う「自ら学ぶ子」は、次のような児童像をイメージしている。

- ・自分なりの目標を設定して取り組める子
- ・友達の意見を受け入れ意思表示できる子

こうした児童を育成するため、また、課題である基礎学力の定着の不十分さを解消するため、職員一丸となって実践に取り組んでいった。

2 実践の内容

今年度、南下浦小学校が力を入れて取り組んだのは以下3点である。

- ①「学びのプラン」の導入
- ②「あたたかい聴き方・やさしい話し方」ステップ表の取組
- ③基礎学力向上に向けた取組

①「学びのプラン」の導入

従来、校内研究では学習指導案が用いられ、その内容を知るのは教員のみだった。学

びのプランは、その内容を児童に提示することを前提としている。学習指導案と大きく構造の異なるものではないが、その内容は児童の目線で、かつ平易な表現を用いて書く。児童は「この単元で何を、どのように学び、何ができるようになるのか」を把握し、意識しながら学習に取り組んでいく。

今年度は、その導入に踏み切った。横浜国立大学名誉教授の高木展郎氏に助言をいただきながら、職員間で形式、提示の仕方等を検討していった。導入するとともに、活用機会を広げることをめざし、日頃の授業にも「学びのプラン」を積極的に取り入れた。

②「あたたかい聴き方・やさしい話し方」ステップ表の取組

昨年度から継続して取り組んでいる。自ら学ぶ子を育成するため、特に「意思表示ができる子」の育成のためには、必要不可欠な実践といえる。子どもたちが安心して聴き、話し、考えを深めることができるよう、学習指導要領の内容をふまえて作成した。1年生であれば『からだをむけて（聴く）』、『みんなにきこえる大きさを（話す）』など、めざす姿が具体的に示されている。

今年度も、このステップ表の掲示、達成できた項目の見える化を継続して行った。「学びのプラン」導入という新たな挑戦の陰で形骸化してしまわぬよう、年5回、定期的に各学級での取組や経過を報告・交流する機会を設けた。その際にはICT活用の研修も兼ね、Google Jamboardを利用した。

③基礎学力向上に向けた取組

こちらも継続している取組である。朝の15分間を「ベーシックタイム」とし、国語、算数の基本的な学習問題に取り組む時間とした。語彙を増やし、読解力を高めることは様々な教科の学習に、また「聴き方・話し方」にもつながっていくと考え、国語では「言葉」に特化したドリルに取り組むなどした。

3 実践の成果

①「学びのプラン」を導入して

学びのプランを提示し授業に取り入れることで、児童は見通しを持って学習に取り組むことができた。6年生にアンケートをとった結果、プランがあることで見通しが持てたと回答した児童は8割以上であった。

また、作成する中で教員自身が単元全体を見通し、教材研究を深めることにもつながった。プランには評価の観点も示すが、学習指導要領の文言をそのまま記載しても、児童にとっては難解である。平易な表現を模索することが、内容の深い理解にもつながっていった。

今年度は、教員が自由に試行錯誤しながらプランを作成・導入していくことを重要視した。教科を統一しなかったことで、結果として様々な教科のプランを作成できた。

②「あたたかい聴き方・やさしい話し方」 ステップ表の取組を通して

ICTを活用しながら効率的に情報共有することで、学びのプラン導入と並行しながら取組を継続することができた。この取組により、低学年では聴く姿勢が身につく、中高学年では話す力が向上した。「短くまとめて話す」「相手意識を持つ」など各学年の課題も共有することができ、次のステップに向けた指導に活かすことができた。

③基礎学力向上に向けた取組を通して

朝15分間の継続的な取組が、基礎学力の底上げにつながった。国語では、語彙が増えることが、より深い話し合い活動につながっていった。言葉に気を付けて学習しようとする意識も高まっていた。算数では、基礎学力向上に向けた計算プリント等に取り組んだ。授業では話し合い活動が主だが、各学級実態に応じた内容で、それを補完するようにベーシックタイムを活用できた。

4 今後の展開

(1) 今年度の課題

1つ目は、協議会の在り方だ。学びのプランを導入することで、「単元」を見通した検討・協議が求められるようになった。限られた時間内で検討・協議を深めるには、協議会の在り方そのものも見直さねばならない。

2つ目は、公開授業におけるプランの作成方法だ。今年度は授業者が代表してプランを作成した。短い検討会の中では単元の特性や全体像を掴みきれず、検討の場で意見が出しづらいつと感じた教員もいた。

(2) 今後の展開

協議会の在り方に関しては、講師の先生にもご助言いただきながら、プランを中心に据えた会の持ち方を探していきたい。

公開授業のプランの作成方法に関して、次年度は、検討会に参加する教員全員が授業者と同じように教材研究を行い、一人ひとりがプランを作成していく。全員で教材研究する場、また作成途中のプランについて気軽に相談できる場を新たに設定する予定だ。

「自ら学ぶ子」を育成する立場として、教員も自ら学ぶ姿勢を忘れず、今年度得た学びを次年度につなげていきたい。